

北海道大学

I. 実施報告

(1) 実施責任者報告

北海道大学医学部教授 阿部 和厚

1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

平成4年度の北海道大学放送講座は、10年目ということで北海道の大学放送講座としてのこれまでの実績を固め、今後を展望し、新たな一步を踏みだすことにした。実施協力体制は、従来と同様に、放送教育開発センターのもとに北海道大学放送教育委員会が中心となって北海道放送（HBC）との連携、北海道と道内6市（札幌・旭川・留萌・函館・帯広・北見）の教育委員会の後援によった。放送教育委員会は、交代の3人と主任講師4人を加えての学内選出委員17人で企画と実施を進行した。委員長は前年度から継続2年の阿部であった。委員会には、オブザーバーとして従来からの放送局関係者、北海道教育庁担当者が加わった。事務は、前年度までの庶務部庶務課生涯学習掛がなくなり、かわって同課の学務掛2人で担当した。

各委員は前年度に制作した「委員会マニュアル」、「テキスト作成マニュアル」、「テレビ番組制作マニュアル」、「ラジオ番組制作マニュアル」、「広報マニュアル」を最初に手にし、これまでの蓄積を受け継いで効率よく任務を遂行した。必要なマニュアルはテレビ講座とラジオ講座の担当講師にも渡され、初めての担当でも最初から内容と目標を把握して作業できるようにした。また、事務担当者との連携もよく作業は進行した。さらに、番組を直接担当する主任講師以外の各委員は、例年の講座実施業務の他に、つぎのいずれかのワーキンググループで実質的な作業をした。

- 1) テーマ開発ワーキンググループ：全学にテーマを公募し、応募テーマを評価し、平成5年度から2年分のテーマ候補を決定した。また、その他に数年分の具体的に可能なテーマをもつことになった。
- 2) 10周年記念行事ワーキンググループ：地域公開のシンポジウムを10月9日に「地域に開かれた大学は いまー放送の電波にのせて」を実施した。企画は放送局とも協力した。大学放送講座の広報効果をねらい、これまでの成果をもとに今後の展望をさぐった。大学、放送局、教育委員会、受講生の代表が話題を提供した。170人が参加した。
- 3) 受講生アンケート調査ワーキンググループ：これまでの本学のアンケート調査内容を再検討し、改訂した。

2. テーマの選定とそのねらい

地域に開放する大学放送講座は地域の文化を反映する。テレビ講座、ラジオ講座ともに懸案のテーマをとりあげた。ともに担当講師は半数以上が北海道大学以外からであった。

テレビ講座は、北海道の住宅を文化として取り上げた。北海道の気候は冬の雪と寒さ、夏の涼しさを特徴とし、住宅はこの気候に適応したものとなる。マイナスに捕らえられかねないきびしい気候は、これに適応する住宅をつくることをめぐって、豊かな生活と地域文化を形成するプラスの豊かな環境となっている。これを認識するのがねらいである。北海道の住宅を中心に豊かな生き方という人間性、人と人との交わりの大切さ、それを支える環境がみえてくる。

ラジオ講座は、世界的視点で最も今日的テーマのひとつである激動の東欧を多面的に捕らえた。歴史的にみると東欧は東洋と西洋、様々な民族、文化の行き交う文明の十字路であった。その東欧が今日大きく揺れ動いている。そして明日はどうか。北海道は、北海道大学にスラブ研究センターがあることにみるように、東欧研究の中心となっている。この講座の講師陣は北海道と日本の東欧研究の第一人者の専門家であり、東欧諸国の多様性、個別性、共通性をさぐるのがねらいである。

3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけ

北海道大学放送講座では、その年度のテーマによる番組、印刷教材、学習指導は主任講師と担当講師および放送局によって具体的に実施されていく。このさい、各番組は担当講師と放送局との共同作業により制作される。これが放送されると、印刷教材をもつ受講生よりも100～200倍の数の地域住民から視聴、聴取される。したがって、番組は印刷教材から独立制作される。印刷教材は番組と同じテーマを扱い関連性をもつが、一般市販もされるため、番組とは独立できるものとして作成される。すなわち、番組と印刷教材は同じテーマのもとに互いに相補するが、独立できるものとして用意される。一方、教育は双方向性であるべきであるが、放送講座は担当講師から受講生への電波による一方通行性である。その意味で、講師と受講生が対面するスクーリングは、とくに放送講座では重要となってくる。放送講座の一方通行性を補うためには、一方通行の講義よりは受講生中心となる討論を重視する必要がある。また、「受講生サービスと受講生拡大」についての3年間の新潟大学との共同研究による成果のくはがきによる双方向コミュニケーションも、放送講座の欠陥を補うものとして好評であり、本年度も実施した。

4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応から）

北海道の気候条件を環境の豊かさとして捕らえ、これを北海道の住まいに生かし、地域の文化に高めるというテレビ講座は、住宅の話題ではハウツーものが多いなかで新鮮な視点となり、好評であった。また、ラジオ講座は、いま激しく動いているが実態がよくわからない東欧にいろいろな角度から具体像を与えるものであり、評判も高かった。

シンポジウムで得た放送講座全般に対する受講生の反応では、スクーリングを受講生以外にも公開する、スクーリング会場を各地区にさらに増やし、放送講座受講の層を広げる、高校生をも対象にする、普段にない科学的視点を与えられた、双方向コミュニケーションはよい、専門的でない平易な表現がほしい、もっとPRをほしいなどがあった。

5. 印刷教材の作成課程について

大学放送講座テキストは多人数の担当講師によって執筆されるため、文章や語句を統一し、一冊の本として一貫性をもたせる必要がある。これまで北海道大学放送講座は、原稿執筆締切を5月末日としていたが、一般に全講師からの原稿がそろふことが、遅れる傾向があった。そのため、原稿が揃ってから主任講師は原稿統一に過密な作業を強いられることとなっていた。本年度からは原稿執筆締切を前年度3月末とした。しかし、連絡の不行き届きもあって、原稿が揃ったのは前年と同様となり、印刷発注に合わせるために例年のような忙しさとなった。そのため、平成5年度放送講座のためには、秋に企画を決定し、原稿執筆締切の前年度3月末を徹底することとした。このように、各放送講座は企画から終了まで2年を要し、冬をテーマにすることの多い北海道では、撮影もしばしば前年に始まる。

6. 学習指導の実施状況について

例年と同様に、1) 再視聴、2) 地区チューターによる学習指導、3) 放送講師による札幌と地区学習センターでのスクーリングの3形態で実施した。

スクーリング等のための学習センターは、現在、札幌の他に函館、留萌、旭川、帯広、北見にあり、地区教育委員会の支援により、受講生募集、スクーリング等を行ない、北海道の広域性に対応している。しかし、北海道全域をカバーするためには、少なくとも釧路、稚内地区を加える必要がある。本年度も、稚内地区の利尻島からスクーリングの申し込みがあった。利尻島には放送講座受講生を中心とする学習グループがあり、既存の留萌あるいは北見の学習センターは遠すぎるため、稚内学習センターの設置を望んでいた。また、釧路には、地区独自の生涯学習センターが構想されていて、大学放送講座の導入を希望している。これらの地区は放送講座の中心大学からも遠いだけに、地域住民の大学公開の意味は大きい。需要に対応するためには、これまでと異なる形態の学習指導体制も考慮されなければならない。

7. 「大学教育の地域社会への開放」にはたす役割について

地域の大学が地域の放送局と連携して地域に大学を公開することは、地域の文化を担うことになり、地域に大学が存在することの意義をささえる。また、大学で行なわれている学問を一般に理解してもらい、知ってもらうことは、社会人の生涯学習へ貢献するのみならず、社会の理解に支えられた大学の発展にも結びつく。今日、大学の自己点検評価の作業が進行しているなかで、地域住民の生涯学習への対応は教育、研究と並んで大学機能の3本柱となっている。しかしながら、評価の中心は研究であり、教育への評価法は確立していない。まして、大学の開放は、評価の対象となっていないに等しい。大学の質を保つために、研究は必然として評価される。このような時代に教育、大学開放を大きく評価し、支援していくことは国の問題となっているのではなかろうか。研究と同様に見える形で高く評価されてはじめて大学人の積極的参加があり、大学公開活動が発展する。

私どもの調査では、受講生は放送講座に実用的よりも教養的内容を求めている。大学の放送講座の教養的内容はカルチャーセンター的内容というより大学の学問的内容を提供するのが独自性をもつことになる。もちろん、役に立つ学習への要求もあるが、これは一般的にはむしろ

講義や授業形式の大学公開講座で扱う方が効果的である。ここでは放送講座は、視聴覚教育という方法論で活用されるのがよいであろう。

8. 「大学の授業への活用」の現状と今後の可能性について

北海道大学では、これまでのテレビ講座のテーマで2単位の総合講義科目としているものがある。ここでは放送講座の映像も使用されている。また、教官によっては放送講座映像を編集し直して授業に活用している。しかし、視聴覚教育は大学ではそれほど普及していきず、授業の主体は旧態依然の黒板による。この理由には、とくにビデオ教材の作成が容易でないことにもよる。また、すべての教官に大学放送講座での放送局が制作した教材を提供することは、経済的にも時間的にも不可能である。大学で放送講座の経験はそれほど生かされないことになる。そこで、北海道大学では、大学放送講座の研究の一環として、今日の進歩した高精細小型テレビカメラ、編集装置を中心としたテレビ教材制作システムを開発し、共同利用していくためのプロジェクト研究を進めることにした。これにより教官の誰もが気軽にテレビ撮影して自分の机の上で編集作業ができ、容易にテレビ教材を自作し、授業に活用していけるようにする。このように視聴覚教育教材作成を広く普及することから、逆に放送講座を支援することも目標とする。

また、今日、大学は学部一環教育体制となる。入学前に大学の学問内容を具体的に把握している必要がある。大学放送講座が高校生へ大学の学問内容を伝える役目をもつようにすることも考慮しなければならない。

9. 実施上の問題点と今後の課題等について

- 1) 放送講座の実施にはテーマ企画から放送終了、調査の整理まで2年を要する。また、一般に大学教官はきわめて多忙なため、時間の取られる放送講座担当は多大な負担となる。積極的参加を得にくい。そのため、テーマを公募し、実現可能な幾つかのテーマを常にもち、主任講師の積極的参加によってよりよい講座を実施するのも方策である。
- 2) 北海道の大学放送講座として、これまで北海道大学以外にも講師を多く求めたが、この10年間の実施の経験、実績、体制を今後に生かし、さらに複数大学が連携して放送講座を実施していく体制も検討していく必要がある。
- 3) 放送講座の実施経験は意外に大学の教育現場に生かされにくい。放送講座形式の教材制作には、大規模な機器、予算、時間、人を要するためである。教官の誰でもが手軽に安価にテレビ教材を自作するためのシステムをもち、テレビ教材を大学の授業に常用していく教官数を増やし、この経験と映像素材を放送講座に生かしていく必要がある。
- 4) 放送講座を受講で単位をとれることも要望される。これには、単位を修得したことの判定となる評価が問題となる。各講座の学習目標（到達目標）を明らかにし、各受講生を評価する方法を確立できるであろうか。
- 5) これから大学に入ってくる高校生、若者に大学の学問を知ってもらうことも目標とする。

(2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) 北海道の住まい—環境の豊かさを生かす—

主任講師：工学部教授 足達富士夫

「北海道の住まい」というテーマは誰にも身近な問題であり、また居住環境に、本州にくらべておそらくまだきびしさを感じているひとの多い北海道では関心をひくテーマであろう。ただ私たちは「温かな住宅の上手なつくり方」といったハウ・ツウものをつくることは、最初から考えなかった。単なる防寒技術はほとんどの面で完成の域にたっている。むしろ問題は、ひとびとが北海道の気候条件をどうとらえ、どう対応するかが環境の独自性を生かすゆえんであることを知ることであって、この点ではまだまだその環境の、ことに冬のプラスの特性に気付かないひとが多いようにおもわれる。大学の放送講座の意義もそうしたひとびとの「考え方」の変革をめざすことにあるであろう。ただその意図が視聴者に正確に理解してもらえるかどうか、やはりハウ・ツウをもとめるひとが多いのではないかということについては、一抹の不安がなかったわけではない。

けれども結果から見ると、私たちの意図はおおむね正当にうけいれられたようにおもわれる。視聴率も比較的たかく、スクーリングやはがきの回答からみても、楽しくわかりやすく勉強になったというのが多かった。的を射たするどい質問もすくなくなかった。講座はおおむね成功であったと考えている。

考え方といっても、技術の裏付けが必要である。全体の構成は前半に環境のとらえ方、北海道の住宅の歴史の特殊性、生活様式の独自性、住宅を町並みとしてとらえることなどのほか、高齢者問題もふくめて、いわば住環境づくりのソフトに関することをあつかい、後半は、暖房、断熱、リサイクルなどのソフトをささえる技術の考え方をあつかった。そしていずれの章も、将来のあり方について講師の考えをのべることを原則にした。おおむね「わかりやすかった」という評価をうけている。なおはがきで、住宅に「町並み」という見方があるのをはじめて知ったという人が多かったのは、意外でもあり、また講座の効果のひとつとしては心づよくもあった。

視聴者の反応は正確にはとらえられないが、つよく感じるのは、やはりテレビというメディアの効力である。ハウ・ツウものならともかく、住環境の考え方というようなものは活字を通して大勢のひとに理解してもらうのはむずかしい。視聴率から計算すると、およそ2万人のひとが見たことになるらしい。講師が不慣れなこともあり、すべての視聴者に正確に理解されたかどうかは別として、放送講座の有効性を感じるとともに、苦労したがやりがいがあったと考えている。はがきによれば、放映時間の配慮とともに、再放映をものめる声がつよかった。

準備には1年の期間があったが、やはりどたんばであわてることになった。ひとつにはテレビの番組づくりというものを理解していなかったこともある。大変な仕事だということがよくわかった。主任講師としては、テキストを読みやすくすることと、各講師に自分の考えをできるだけはっきり出すようもとめたほかは、とくに注文をつけることをしていない。そのためにかえって各講師の個性をだすことができたとおもう。むしろ雑務になやまされた。自分ではけ

っして片手間の仕事とは考えてはいなかったが、自分のふだんの仕事にかまけて、この仕事全体のこまかなスケジュールは頭から去っていることが多く、急に事務局から催促されて、十分推敲する余裕なしに、たとえば前書をかいたりスクーリングのスケジュールをつくったりするというようなことが多かった。専用の時間がほしいという気はしばしばした。もっとも、たいていはふだん考えていることであって、たっぷり時間があっても格段にすぐれたものができたかどうかはうたがわしい。ただこれは身勝手ないいぐさかもしれぬが、スクーリングのスケジュールのような、ほとんど事務的なことは、事務局で素案をつくり、講師の都合をきくというようなことでできないかと思う。

(ラジオ科目) 文明の十字路口—東欧

主任講師：文学部教授 灰谷 慶三

今年度のラジオ放送講座は、「文明の十字路口—東欧」と題して、社会主義体制の崩壊というここ1、2年の激動によって大きな注目を集めている東欧世界を取上げ、東欧世界の成立、その後の展開・現状・将来像を縦軸に、広く民族、政治、経済、社会、文化の面から、その多様性、個別性、及び共通性をさぐることを目的とした。とりわけ、現在なお流血の内戦をくり広げている旧ユーゴスラビアのような状況がどうして生じるのかに焦点を当てて講義を行った。

受講者数は、募集定員をやや下回ったが、昨年と比較してほぼ満足すべき数字ではなかったかと思う。

講義について言えば、東欧世界の複雑さにちなみ、講師側としてはできるだけ分かりやすいように、テキスト、放送内容に工夫をこらし、考慮したつもりであったが、それでも難しかったとの声がかなり寄せられた。しかし、双方向コミュニケーションによる受講者の反応は概ね好評で、受講したことによって新聞等での東欧に関する報道内容がよく理解できるようになった、あるいは、東欧と比較しての日本の現状を改めて考える機会を得た、東欧のこれこれに関してもっと勉強したい、本を読みたい、といった意見が多数寄せられたことは、我々の当初の目的がそれなりに達成されたのではないかと思っている。同時に、受講者の講座に寄せる熱意、期待をも感じさせられた。

放送では、放送局側の熱心なご尽力によって、音楽やその他の音声を効果的に使用することができ、好評を得た。また、放送については素人の講師に適切なアドバイスをいただけたことは幸いであった。その意味で、講師と放送局側との緊密な二人三脚は、今後とも重要であることを指摘しておきたい。

スクーリングについて言えば、札幌での出席率は良好であったが、他会場では予想外の少数であった。出席者からは、出席して大変良かったとの声が寄せられているが、札幌以外での開催を今後どうするか考える必要があろう。特に、北海道では、一会場のかかえる地域が広く、かつ、冬期開催のため天候にも左右されやすいという点に留意することが必要と思われる。

最後に実施体制について言及したい。現行の実施体制は、率直に言えば、主任講師に多大の労力を要求するものであって、本務との関係から疑問の予知なしとしない。また、本講座は、現在、一定の大学に限って担当しているが、多くの大学に門戸を開放する必要があると考える。

Ⅱ. 制作報告(テレビ科目)

(1) 制作責任者報告

北海道放送報道制作局次長 吉田 豪介

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

私たち大学公開講座の制作スタッフは、この10年の経験の中で、番組の制作基本方針を次のように絞り込んできている。

- ①大学の公開講座としての知識レベルを維持し、視聴者を知的に刺激する。
- ②内容を易しくするというより、興味深くする。そのためにテレビ放映を工夫する。
- ③テキストに比べて情報量が少なくなっても、正確に理解される表現・手段を心がける。

この基本方針に沿った番組制作のために、北海道大学放送教育委員会とは早い時期から企画構成、年間スケジュールなど細部にわたって相談しあい、問題の調整には共同で取り組んだ。平成3年12月の段階で、大学側講師団と番組制作の専門集団が全員でテーブルを囲み、納得するまで話し合う機会を持った。講座全体のスタンスが確定した後、早い立ち上がりで講師とディレクターのマンツーマン体制が取れたが、大学と放送局とのスムーズな協力関係がそれを可能にしたと評価している。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

今回のテーマは、北海道の住宅を環境面から取り上げ、マイナス面をおさえて、プラスのゆたかさを引き出すことに主眼が置かれた。これは、住宅という狭い領域にとらわれず、町並みや生活の仕方など、北海道における「住まい方」そのものを問い直すものであった。このため、映像取材では、本州との住宅を比較検証する為に、京都、遠野などの撮影を行った。また、各講師には、スタジオをできる限り離れて、解説を日常研究のフィールドで展開してもらった。

今回の講座の狙いが、北海道の環境の豊かさをひきだす住生活のありかたであったため、実際にこの環境に住んでいる人たちへのインタビュー取材を心掛けた。これは、住宅が生活のうつわであるとともに、一年の半分近くが冬期間という厳しい自然条件の下で、北海道ならではの意味を問いたかったからである。

番組の構成上留意したのは、講師と視聴者の関係である。住宅という身近なテーマだが、環境をめぐる観念的な表現が多くなりがちなため、各講師には、より具体的な事例を上げてもらうようお願いした。

スタジオでは、自然を感じさせる開口部の大きなセットを組み、講座内容を身近なものにするようつとめた。また、アナウンサーは「北海道の住宅に関心を持つ視聴者の代表」という位置付けで、番組進行役に徹した。

3. 番組の視聴状況と成果(評価、反応)について

この番組の視聴率を考えると、受講生を含め何万人もの人が視聴していることになる。テキ

ストを持っている受講生には、大学公開講座としての知的レベルを維持することにつとめ、一般の視聴者には、大学教育の公開という視点から、いかにそこに興味を持ってもらうかと考えている。

今回のテーマは生活のうつわである住宅であり、わかりやすさもあって、番組のスタート当初から視聴者の関心と呼んだ。そのことは、視聴率のアップや番組内容の問い合わせ、再視聴の希望などがいままでより多いことで示されている。特に高齢者住宅を取り上げた講座に関連して、地方の市町村役場から、番組で紹介したケースや所在地の問い合わせが多く、道内の各市町村が、高齢化社会への対応を迫られている現実を浮き彫りにさせる結果ともなった。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

今回は、住宅という視覚的な対象であったため、例年以上に、映像の重要性が求められた。住宅を取り巻く環境や地域まで広く取材することも求められた。さらに、北海道の住宅は冬期間における「住まい方」に問題が多いため、前年度の放送講座の制作と並行して冬の間の作業が多かった。

なお、講座の全体を通して利用される図表など、最近はコンピュータによる画像が求められている。より分かり易い番組作りを目指す制作側にとって、これとどう取り組むか。さらに制作費とどう折りあいをつけるかが課題になろう。

(2) 番組制作担当者の所見

制作担当者：北海道放送HBC映画社番組制作者次長 松下 伸

北海道をテーマにしたテレビ講座は、前年の「大いなる島」に続き6回目であった。今年度は住宅を環境面から取り上げ、技術的な側面に偏らなかった。その点テレビ講座に馴染むテーマだったと考えている。そして、こうした配慮によってテレビ講座を展開していただいた講師陣の努力に負うところは大きい。

北海道の住宅は、「夏をむね」とする本州の住まいが持ちこまれ、厳しい冬をどのように住みこなすかに主眼が置かれた。このため本州の住宅や町屋との比較など、例年以上に映像の重要性が求められた。その反面住宅を映像化する上で、日常の撮影機材の限界を認識させられたといえる。たとえば、住宅の柱、室内の奥行きなど、我々が使っている機材では、住宅本来が持っている空間がレンズの性質によって歪曲してしまう欠点を露呈してしまった。こうした場合、建築工学では以前からスチール写真の「あおり機構」を使っており、我々は、日常使っている機材が万能であるかのような錯覚に陥り、状況に応じた工夫を疎かにした結果といえる。

今年度の講座が北海道の環境をテーマに展開してきた背景には、一年の半分近くが冬期間という厳しい自然条件の中で、立て板一枚の住宅で過ごしてきたという現実である。それは開拓以来、「夏をむね」とする本州の住まいに甘んじてきたことでもある。実際に、本州とは異なる自然環境に適用した寒地住宅の改良研究が、本格的に始動したのは最近のことで、学問的分野としても新しい領域であった。それだけに、北海道の自然環境のマイナス面を押さえプラス

面を引き出す試みは、時代に即したタイムリーなテーマであった。

番組を担当したほとんどのスタッフは、生まれたときから寒地住宅の恩恵を受け立て板一枚の住宅など知ることはできない。したがって、北海道に座標軸を置く制作スタッフにとって、好奇心を駆り立ててくれた各講師陣に感謝したい。そして講座の全体を通して、住宅という狭い領域にとらわれず、住宅や町の姿、生活の仕方への展開と、大学教育の開放、改革という今日的なテーマを見据えていたといえる。いずれにしても、テレビメディアと対峙している我々制作者にとって、改革の波が確実に迫っていることも事実である。

制 作 報 告（ラジオ科目）

（1）制作責任者報告

北海道放送ラジオ局制作部長 後藤 篤志

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

北海道では、札幌に大学が集中するため、地方の市町村では日常、一流の講師陣による講義に接する機会はきわめて限られます。「ゆとりの時代」と言われ、人々の教養や知識向上への意欲が高まる一方で、現実には、さまざまな理由から、それを得るチャンスは均等ではなく、北海道という広大な地域を考え合わせた場合、ラジオによる放送講座の存在が得難いものとなるのは言うまでもありません。誰もが興味を持てるテーマをわかりやすく伝える、これが放送講座を制作する上での私どもの基本的な姿勢です。

この10年、放送教育開発センターと北海道大学、北海道放送の三者によって、いい意味での試行錯誤が繰り返され、放送講座の水準の維持と内容の向上が図られてきました。制作にあたっては当初、アカデミズムとジャーナリズムのはざまで、多くの議論を重ね、お互いにカルチャーショックを受けながらも、双方が真摯に取り組んできた結果、今では北海道大学との息もぴったりと合いつつあります。さらに、北海道大学からは、「象牙の塔」ともいわれてきた学問が、この10年の間に地域へ公開され、理解を得られて来たことで、大学と地域の相互の発展に大いに役立っていると、評価をいただいています。

これからも、テーマの選択から講師の選定、内容の協議などに綿密に連絡を取り合うのはもちろんのこと、最終的な制作段階でも、講師の原稿をより分かりやすく親しみやすい放送表現に置き換えていただくなど、関係各位のご理解と協力を得ながら、受講者・聴取者本位の番組作りを進めて行きたい考えです。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

動きの激しい現代社会にあって、常に幅広い層に受け入れられ、役立ててもらえる講座を意識して、企画にあたっています。今年度は、『文明の十字路—東欧』を放送しましたが、東欧諸国の今日の混迷の背景には、民族間の対立と反目の歴史があり、東欧の歴史と文化について

考察することは、冷戦終結後の世界の行方を考えるための絶好の教材ともなりました。

構成的には、肩の凝らない講座を念頭に置き、誰でも気軽に受講できるよう、学問でありながら、なるべく学問くささを感じさせない放送を心がけています。具体的には、音の素材を効果的に使う工夫を行っています。例えば、東欧の場合は、ルーマニアのチャウシェスク政権が崩壊する時、政権打倒を叫ぶ民衆の声が、大統領の演説をかき消す模様や、ポーランドの高校における授業風景などをテープで盛り込みました。また、民族や文化の特色を感じてもらうために、民族音楽や、その国の代表的なクラシック音楽を、随時折り込みました。音を効果的に使用することによって、テキストでは得られないラジオらしい立体的な講座とすることができたと思います。今回の東欧の場合、北海道大学にスラブ研究センターという、東欧を考える上で貴重な専門研究機関があったのをはじめ、大学内に、東欧の文化に対する学究の幅が広く存在したことも、急激な変革に揺れる国に隣合わせた北海道という地域ならではの特色と考えます。

来年度は、『高齢社会をむかえる北海道』がテーマですが、北海道の地域の特性をふまえた、科学的な「高齢化の傾向と対策」としたいと考えます。

3. 番組の試聴状況と成果（評価、反応）について

受講生は、当初の主婦・お年寄りを中心としたものから、高校生が、現代社会の教材の一環として聞いてくれるなど、すそ野も広がりつつあります。

放送に対する意見としては、「高校時代に聞いたラジオ講座のように、メモを取りつづけた。中身の濃い番組」「講師の個性がテレビよりもはっきりと出ている」「内容的に普段あまり聞く機会のない話なので、興味深く聴けた」「わかりやすかった」などの感想が寄せられています。ある主婦から寄せられた投書は、次のように書かれていました。「北海道大学の先生がたの講義に接することができて大変勉強になります。歌番組や、おしゃべりが多い、どちらかというと柔らかいラジオの中で、硬い内容ですがたまにはこういう番組を聞いて勉強し、社会に目を開くのも良いと思います」また、一方で、「テキストにない話をドンドンしてほしかった」「宗教についてももう少し論じてほしい。民族の人生観の背景がわかるから」「まずはじめに結論の部分を出してから話を進めたほうが良かった」などの意見もありました。これらの評価を参考に、より分かりやすく、耳から入る情報がさらに新たな興味を引き出すような放送講座にしていきたいと思います。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

大学放送講座でありながら、大学生の聴講が少ないことが、大学と放送局双方にとって残念なことです。この点について、大学側からは、この放送講座を“大学の単位”として、認定してはどうか、という議論もありました。ただ、現実的には実現にはハードルは高そうです。

今後は、放送講座のすそ野をどのように広げていくか、また、更に聴きやすくするためにはどうすればよいかが、最大の課題だと思います。テーマの設定、伝える方法、そして放送教育という一定の格調を保持することも課題となります。テレビ時代の申し子が、社会の第一線でたくさん活躍している今、大学の先生方にも、もっと、メディアを生かした講義の方法が模索

されてしかるべきだと思いますが、その認識が未だ足りない部分が多いようです。

また、企画の新鮮さに欠ける年もあり、十分な時間をかけての学術研究が必要なのを承知しながらも、タイムリーな題材を大学との間で、双方のノウハウを生かして、実行する試みを模索したいと思っています。

具体的なテーマとしては、「エイズ」「地球環境問題」「政治と金」「日本語の変化と社会」これらを、ラジオのメディアならではの構成で取り組みたいと思います。いずれにしても、大学の先生方の積極的な協力なしには実現しないものであり、これまで以上に綿密な共同作業の必要があるようです。

(2) 番組制作担当者の所見

制作担当者：北海道放送メディアクリエート

テレビ・ラジオ・プロデューサー 五十嵐浩二

『北海道大学放送講座 文明の十字路～東欧』を担当して

本講座の17回の放送を振り返って、担当者としての所見を報告します。本講座は、北海道大学にお二人の主任講師をお願いし、東京からも著名な3人の講師をお招きして実施しました。冷戦後の世界の縮図ともいえる東欧地域の歴史と文化を学ぶことは、私たちに、様々な場面で意識の国際化が求められている今、タイムリーで、示唆に富む企画であったと考えます。

今回、講座の趣旨説明と問題提起を、毎回、主任講師の藤家壯一北大教授にお願いしましたが、豊富なご経験をもとに、東欧地域の歴史と現状について、たいへん分かりやすい言葉でご説明いただきました。先生のお話は、講座への誘導効果とともに、すぐれたガイダンスにもなり、聴講者に講座への期待をつないでもらう上で、大きな成果があったと思います。ただ、これは、ひとえに藤家教授のお人柄によるところが大きく、本講座以外にそのままあてはまる方法ではないことを申し添えておきたいと思います。

また、主任講師の灰谷慶三北大教授には、講師陣のコーディネートにご尽力をいただくとともに、各テーマに沿って、幅広い見識をご披露いただきました。

講師の皆様には、ご多忙な中、テキストと放送原稿の執筆にご苦勞をいただき、感謝いたしておりますが、ここで、今後の展開のために、いくつか反省点をあげたいと思います。

まず、放送講座ですから、リスナーは大学の教室のように、ラジオの前でテキストとノートを用意して、じっと聞き入る人ばかりとは限りません。仕事中のタクシードライバーもいれば、編み物をしながら耳を傾けるお年寄りもいるはずです。ところが、これは、大学放送講座を厳密に学問と捉えるか、広い意味での教養講座と位置づけるかで、見解が分かれる所でもあるんですが、先生方には「難解でも、学問としてここは必要だ」とする方が少なくありません。その場合、講義はえてして、専門的で一方的な表現に陥ってしまうものです。しかし、幅広い受講者が対象の放送講座に、まず求められるのは、「分かりやすさ」であり、「楽しく学べること」だと思います。専門の研究分野について、専門家の言葉でお話いただくだけでなく、一般の人は、この国の何処に、何を興味を抱くだろうかということを、まず念頭に置かれて講座のご準

備をいただく心構えが、講師の先生をはじめ、スタッフにも必要と考えます。

次に、東欧の情勢は、今、揺れ動いています。それは、民族と国家の間に横たわる歴史の呪縛から逃れられない、複雑で出口の見えない迷路を思わせます。それゆえに、今、状況の中にリアルタイムに置かれている人々が、自国の歴史と民族の遺産をどう捉えているかは、興味の尽きないところです。収録と、放送の間にタイムラグが出来るという物理的な制約はあったものの、東欧の人々をよく知る講師陣に、もっと、東欧の現状への見識を語っていただくべきであったと、反省しております。この点で、主任講師の藤家壯一教授には、本編のあとの総括的なまとめで、ご自身の体験をお話いただくことで、講義全体を身近な存在に印象づけていただき感謝しております。

なるべく学問くささを感じさせない放送を心がけ、東欧の音楽や、実況音などを努めて多用し、番組に立体感がうまれるような工夫を加えましたが、まだ、講義が難解であったという反応も一部にありました。これらの反省を十分にふまえて、今後の番組作りにあたりたいと思います。

Ⅲ. 講座の概要

◎ 科目の概要

科目名	中心的なテーマ	科目のねらい内容・方法	放送曜日・時間・期間
北海道の住まい —環境の豊かさをどう生かすか— (テレビ)	北海道の住宅という と冬あたたかい住宅と いうことがすぐ頭にう かぶが、冬あたたかい 住宅をつくるだけなら たいして工夫もいらな いし、むずかしいこと ではない。むしろマイ ナス要素とみられるこ との多い雪と寒さの環 境を逆手にとってプ ラスに転化することが大 事な課題だ。それがな ければ寒地は温暖地に たいして永久にハンデ ィをおくことになる。 それはむずかしい課題 だが、その方向につい て考えてみたい。	北海道の冬の雪と寒さの環境は、昔から住みにくい環境としてとらえられることが多かった。けれどもほんとうに住みにくい環境なのだろうか。夏は本州ではめったに出会うことのないさわやかさだし、冬寒いというのも、それは東京などでつくられてきた住宅をそのままもちこんでいるからではないか、実際に、断熱住宅がずいぶん普及してきた最近でも、中身は東京あたりの住宅と防寒の点ではたいしてかわらない住宅をよくみかける。東京だって夏の服装で冬は過ごせない。夏むきにつくられてきた住宅では北海道の冬がきびしいのがあたりまえだ。住宅だけではない。生活の仕方でも北海道の環境に見合った独自の仕方ですごすなら、自然のゆたかさを引き出すことができるのではなかろうか、自然環境にはマイナスだけということはないので、環境の特色というのは必ずプラスとマイナスとが一体になっているはずだ。 この講座では、北海道の自然環境のマイナス面をおさえプラスのゆたかさをどうしたら引き出すことができるかを住宅の面から考えてみたい。だからここでは「暖かな家の上手な作り方」といった話ではなく、自然のゆたかさを生かすための、住宅と住生活のあり方が主題である。技術の話にもふれるが、それはあくまで話を具体的にするためである。 前半では北海道の自然環境の特徴とそのとらえかた、それにふさわしい住宅の構成、デザイン、町並みなど住宅と住生活のあり方をあつかい、後半では断熱、暖房、リフォーム、雪処理など、主として技術的な面をとりあげる。	毎週月曜日 (日曜深夜) 午前0:20 ～午前1:05 平成4年 10月19日 / 平成5年 2月1日 (11月16日、 12月28日、 1月4日を 除く)
文明の十字路—東欧	ひと口に東欧世界と言っても、歴史的経過から、その地に住む民族はスラブ系、アジア系、ラテン系と複雑であり、又、文化的にもキリスト教文化やイスラム文化が入り混じっ	本講座は、社会主義体制の崩壊という激動と変革の時代を今日迎えている東欧地域を様々な角度からとらえて、その歴史と現状と将来像を探るのが目的である。 そこで、最初の2回では、東欧の範囲、東欧史の特徴、東欧の民族、言語、宗教等について歴史的に概観する。第3～5回では、今日の東欧変革の先頭を切ったポーランドを取上げ、政	毎週日曜日 午後9:00 ～午後9:45 平成4年 10月18日 /

	<p>ている。本講座は、このように入り組んだ東欧諸国を取りあげ、東欧世界の成立、その後の展開・現状、将来像を縦軸に、広く民族、政治、経済、社会、文化の面から、その多様性、個別性、共通性を探ることを目的とする。</p>	<p>治、経済、社会、文学の面からその特質を検討し、なぜポーランドにおいて東欧最初の改革が始まったのかを明かにする。第6回では流血を見ずに「緑の改革」を成し遂げたチェコ・スロバキアを、第7回ではアジア系民族の国ハンガリーを取上げ、それぞれの歴史、社会、文化の現状を解明する。第8回では、民謡の宝庫と言われる東欧の音楽を取上げ、それぞれの民族音楽の個性と共通性を探る。第9回では、ラテン系民族の国ルーマニアを取上げ、その文化的伝統と今日の姿を明かにする。第10～12回では、近世においてオスマン・トルコ帝国の支配を受け、イスラム文化の影響が色濃く残るブルガリアおよびユーゴ・スラビアを取上げ、その歴史、政治、経済、文化等について考察し、現在の民族対立の原因を分析する。最終第13回では、以上の考察を踏まえて、座談会形式で、東欧世界の将来像を探る。</p>	<p>平成5年 1月17日 (1月3日を除く)</p>
--	--	--	-------------------------------------

◎ 科目の構成

(テレビ科目) 北海道の住まいー環境の豊かさをどう生かすかー

放 送 回 (月日)	中心テーマ	内 容	担 当 講 師
<p>第 1 回 10月19日</p>	<p>風土と住宅 ーまず自分自身の 特徴を知るため にー</p>	<p>北国には物まねでない独自の風土対応が必要です。 北海道には、日本列島の北端にありながら低緯度で強い日射しがあり、寒冷多雪な冬の一方に暑い夏があって、変化と地域差に満ちています。風土、建築、社会、文化のどこに、どのような違いがあり、特徴があるのか、まず自分自身を知るところから始めます。</p>	<p>荒 谷 登 (北海道大学 工学部 教授)</p>
<p>第 2 回 10月26日</p>	<p>歴史に学ぶ</p>	<p>「夏をむね」とする日本人の住まいが北海道に持ちこまれて、基本的な課題は厳しい冬をどのように住みこなすか、であった。それはまた「内地」で永い間につちかわれた伝統や感性を、初めて体験する「外地」の環境に摺りあわせながら、新しい生活文化をつくりだしていく過程でもあった。その足取りをたどりながら、現代のわれわれが忘れかけている住まいの多様な姿を探索していきたい。</p>	<p>越 野 武 (北海道大学 工学部 教授)</p>

第 3 回 11月2日	住みよい家の姿	日本の伝統的な住宅では夏のむし暑さをしのぐために、できるだけ外と一体になる開放的な家のつくり方が求められてきた。これは視覚の上では広がりやゆとりを感じさせるすぐれた空間構成手法だけれども、気候条件のちがう北海道では、温度環境の上ではできるだけ内と外とを絶縁したい。このことは住宅の形、間取り、規模さらに生活様式にまで伝統的な住宅とは別の考え方を必要とする。	足 達 富士夫 (北海道大学 工学部 教授)
第 4 回 11月9日	住宅のデザインと町並み	住宅地の雰囲気の良い悪しは私たちの生活とりわけ子どもたちの成長に大きな影響を及ぼす。住宅地の景観にとって住宅そのものの外観デザインに加えて、門塀や車庫などの外構物、植栽、石油タンク・ガスボンベなどの付属物のありようが問題となる。美しい愛着のある町並みを形成するには、住宅供給者の設計力と同時に、それを維持管理する住み手の能力が要求される。	大 垣 直 明 (北海道工業大学 教授)
第 5 回 11月23日	集住の文化	できるだけ人びとが集まってコンパクトに住まうことは、多雪寒冷条件の中では雪処理や暖かさの点で有利なだけでなく、人々の社会生活を豊かにする。けれども従来の町や集合住宅、伝統的な町家は北海道では不十分である。北海道の地域条件で求められる集住文化の形とコミュニティのあり方について考える。	足 達 富士夫 (北海道大学 工学部 教授)
第 6 回 11月30日	高齢化社会の住宅と町づくり	高齢者も自立した住生活が望ましいが、老人にとって積雪寒冷の条件はことにきびしい。しかもその高齢化が急速に進んでいる。一方核家族化が進み、その上女性の社会進出がふえて肉親の援助にも限界がある。ホーム・ヘルパーの数も先進福祉社会にくらべると桁違いに少ない。こういう状況の中で、公的福祉関連システムとの連携も含めて望ましい住まいのあり方を模索する。	菊 地 弘 明 (北海道工業大学 教授)
第 7 回 12月7日	住み方と住まいの形	空間の持つ魅力を十二分に理解してもらうように解説する。空間の成立を平易に説明し、住まいの中の行為を心理的、肉体的に把握しながら、それぞれに適切な区間を創造する行為を解説する。	圓 山 彬 雄 (株)アープ建築研究所 所長)

第 8 回 12月14日	住宅の若返り ー住宅のライフサイクルー	新築の時が最も美しく、住むほどに汚れ、壊れてゆく住宅では、希望も愛着ももてません。住宅を頻繁に立て替えたのでは資源の浪費と環境汚染をまねき、大きな負担となります。住みながら手を加え、年を経るにしたがってよくなっていく住宅をつくることは、豊かさへの鍵です。このことはとくに寒冷地では重要です。	鎌 田 紀 彦 (室蘭工業大学 助教授)
第 9 回 12月21日	断熱住宅の「断熱と換気」 ー冬対応の変遷とこれからの課題ー	暖地の伝統的建物には、夏対応としての断熱と換気への工夫がある、防寒を旨とする寒地住宅の冬対応は、隙間風の防止から始まった。結露防止と省エネルギーの狭間で揺れ動いてきた高气密化と換気、高断熱化と暖房室数の変遷に触れ、伝統的な熱環境改善の理念に学びつつ、夏をも含めた今後の高断熱住宅の換気計画について考える。	繪 内 正 道 (北海道大学 工学部 助教授)
第 10 回 1 月11日	暖房の考え方 ーエネルギーをどう生かすかー	体温調節機能の低下した老人にとっては風呂やトイレこそ室温が確保されることが大切です。また、気密性の良い家では、結露発生の危険性がありますから、安定した室温を保つための全室暖房が必要になります。そこで、断熱住宅と暖房設備の役割、暖房に必要なエネルギーの量と質、省エネルギーや太陽熱などの有効利用などについて考察したい。	鈴 木 憲 三 (北海道工業大学 助教授)
第 11 回 1 月18日	雪とのつきあい方	住宅地で発生している雪問題を概観しその発生要因などを解説する。これらの雪問題への対応例を紹介しながら設計段階で考慮しなければならない問題を整理し、今後の住宅地における雪対策のあり方を実例や実験例を通じて解説する。さらに、先人達の雪とのつきあい方（共同の雪処理方法や雪の利用方法など）を紹介しながら、これからの高齢化社会などに対応した雪とのつきあい方（例えば、雪を媒体としてコミュニティなど）を探る。	苦米地 司 (北海道工業大学 助教授)
第 12 回 1 月25日	北欧の住宅	北方圏諸国の中で常に寒地住宅の技術をリードして来た北欧、本州とは異なり亜寒帯に属する寒冷な気候を持つ北海道に住む私たちには、むしろ身近な存在である。厳しい冬と白夜に見られる特徴のある気候条件の中で、人々はどんな住まいをつくりどう生活しているのだろうか。住宅に対する考え方を中心に、北欧の住まい造りについて概説する。	福 島 明 (北海道立寒地住宅 都市研究所 研究員)

第 13 回 2月1日	風土を楽しむ	地球環境の保全には、成長の目標転換が必要です。地球の欠点や障害を力づくで克服する発想から、地域や自然の良さを発見し、それを一層顕著にする発想への転換は、競合しない価値、奪われ・奪うことのない成長、共有の富やよろこびを育てる生活への転換をもたらします。そこにはどんな可能性があるかを探ってみます。	荒 谷 登 (北海道大学 工学部 教授)
----------------	--------	---	----------------------------

(ラジオ科目) 文明の十字路—東欧

放 送 回 (月日)	中心テーマ	内 容	担 当 講 師
第 1 回 10月18日	東欧世界の成立	本講座は、今日激動と変革の時代を迎えている東欧地域を、様々な角度から考えてみようとするものです。最初の二回は、本講座の序論として、東欧の範囲、東欧史の特徴、東欧の民族・言語・宗教等について考えた上で東欧の歴史を概観します。第一回は、東欧史の主役であるスラヴ民族が現在の東欧地域に定住し始めた時期から、東欧世界が明確な姿をとり始める近世初頭まで、第二回は、近現代における東欧世界の展開の諸相をたどります。しばしば大国の干渉をうけて、自立的な歴史をつくりだすことのできなかった東欧諸国が、それぞれの民族の独立と繁栄のためにいかに苦闘してきたかを明らかにしたいと思います。	栗生沢 猛 夫 (北海道大学 文学部 助教授)
第 2 回 10月25日			
第 3 回 11月1日	ポーランドの政治	ポーランドは首尾よく共産党の一元的支配から多元的民主主義への移行を成し遂げたといわれるが、はたしてその内実はどうか。大統領民主制と議会民主制の矛盾は解決できるか。新しい指導層はどのような人々か。政党政治はうまく機能するか。政治の安定を達成できるか。比較政治学の観点から現代ポーランドの政治を概観する。	伊 東 孝 之 (北海道大学スラブ 研究センター 教授)
第 4 回 11月8日	ポーランドの経済 と社会	ポーランドの経済は大きく変わったと言われています。しかし経済のしくみとそれを支える社会の構造はそう簡単には変わるものではありません。この章ではポーランドの工場労働者と農民の一生をとりあげ、その仕事と生涯を紹介しながら、経済と社会の問題を考えてみたいと思います。国の経済と社会のありかたは必ず市民の生活に反映されるからです。	吉 野 悦 雄 (北海道大学 経済学部助教授)

第 5 回 11月15日	ポーランドの文学	<p>ポーランド文学は、10世紀末以来発展してきたが、とりわけ18世紀末から20世紀初頭にかけて、失われた国の再興という目的をかけて文学はいちじるしい高まりを見せた。</p> <p>本講座では、ノーベル文学賞を受賞した世界的作家シェンケーヴィチを中心に、国民文学としてのポーランド文学の本質の解明をめざす。</p>	灰 谷 慶 三 (北海道大学 文学部 教授)
第 6 回 11月22日	「チェコ・スロバキアの文化と社会」	<p>ヨーロッパ大陸のほぼ中央にあるチェコ・スロバキアが、激しい嵐の中を今日まで生き抜いてきたのは、高い文化こそが小さい国を支える力だという自覚にもとずいている。この民族が世界に送り出した偉人は数多く、フス、コメンスキー、ドボジャーク、チャペックと実に多彩で、これらの人物についてみることにする。</p>	千 野 榮 一 (東京外国語大学 外国語学部教授)
第 7 回 11月29日	「ハンガリーの歴史」	<p>ハンガリーは東欧の中央部に位置する人口一千万余りの小国です。かつては中部ヨーロッパの大国として周辺諸民族の上に君臨したこともありました。ハンガリー人はもともとアジア系の民族で、言語的にはウラル・アルタイ系のフィン・ウゴル族に属しています。このアジアの民ハンガリー人がカルパチア盆地を舞台としてどのようにヨーロッパ文明と対峙し、これを受容していったのか。講義では歴史上の重要な人物を登場させながら、ハンガリー史の基本的な流れをお話していきます。</p>	家 田 修 (北海道大学スラブ 研究センター 助教授)
第 8 回 12月 6 日	東欧の音楽	<p>東欧は民謡の宝庫と言われてきている。あるときはロシアに、あるときはトルコにそしてドイツにと、常に大国の圧政に苦しみ、民族の離合集散を繰り返してきた辛苦の歴史の中で、音楽に託した民族の哀感や愛国的熱情の発露が、その豊かさの背景となっている、それぞれの民族が明瞭な個性を示しながら、なお共通した東欧の音の色彩をもつものには、国境のないジプシー音楽家達の役割が大きい。</p>	谷 本 一 之 (北海道教育大学 学長)
第 9 回 12月13日	ルーマニアの文化と社会	<p>ルーマニア民族は古代におけるダキア人とローマ人の融合から生まれた民族であり、その文化もラテン語に由来するルーマニア語をはじめ、ラテン的性格が強い。他方、中世には数百年にわたって南スラブ人との共生・混住を経た結果、周辺のスラブ文化の影響も深く、その宗教もロシアなどと同じく東方正教会である。この伝統がルーマニア文化の根である。</p>	直 野 敦 (文化女子大学 家政学部 教授)

第 10 回 12月20日	ブルガリアの文化 と社会	バルカン半島の一角に位置するブルガリアは、スラブ民族の国だが、早くからビザンツ文明の影響を受け、東方正教のキリスト教国となった。ブルガリアで開花したキリスト教文化はセルビア、ロシアにも伝えられ、ビザンツ文明圏の拡大に寄与した。今回は、ブルガリアの歴史をたどりながら、その文化の魅力を探ることにする。	森 安 達 也 (東京大学 教養学部 教授)
第 11 回 12月27日	ユーゴスラビアの 政治	構成諸共和国の独立の動きと国境をめぐる民族間の争いのため、戦火に苦しむユーゴスラビアの近・現代史を概観し、ユーゴで追求された自主管理社会主義や非同盟運動などにも関心を寄せつつ、今日の混迷の原因を探る。文明の交互点ユーゴスラビアの現代政治の諸特徴について解説していきます。	太 田 一 男 (酪農学園大学 教授)
第 12 回 1月10日	ユーゴスラビアの 経済	「ヨーロッパの火薬庫」と言われるほどに、複雑かつ深刻な民族問題をかかえたユーゴスラビアの実態を捉えつつ、大戦後、当時のソ連型の社会主義経済システムを採用したものの、1950年には、いち早くこれを排除して、「労働者による企業の自主管理制度」を導入し、「企業の自主化と分権化」「市場の自由化」をはかったユーゴスラビアが、どのような流れをたどり、現在、どのような状況にあるかを見る。	徳 永 彰 作 (札幌大学 教養学部 教授)
第 13 回 1月17日	揺れ動く東欧 (座談会)	東欧情勢は刻々と変化している。東欧は西に行くか、東に行くか。はてしなく分裂、抗争を繰り返すか、それとも再び統合に向かうのか。社会主義の遺産はどうなるか。欧州文明の摘出子でありながらいつまでも問題児として西欧のあとを歩むのか、ユーゴスラビア、ハンガリー、ポーランドの専門家が東欧の運命について意見を交換する。	徳 永 彰 作 (札幌大学 教養学部 教授) 家 田 修 (北海道大学スラブ 研究センター 助教授) 伊 東 孝 之 (北海道大学スラブ 研究センター 教授)

北海道大学

◎ 受講生の応募等

応募状況

地 区	テ レ ビ 科 目	ラ ジ オ 科 目
札 幌	3 2 0 名	2 6 3 名
旭 川	3 3 名	3 3 名
函 館	3 2 名	2 2 名
帯 広	3 9 名	3 2 名
留 萌	5 0 名	3 1 名
北 見	2 2 名	2 2 名
計	4 9 6 名	4 0 3 名

◎ スクーリング

(テレビ科目) 北海道の住まいー環境の豊かさをどう生かすかー

地 区 名	会 場	第 1 回 実施日時	第 2 回 実施日時	第 3 回 実施日時
札 幌	北海道大学 学術交流会館	11月30日(月) 18:30~20:30	12月15日(火) 18:30~20:30	2月5日(金) 18:30~20:30
旭 川	旭川市 中央公民館	11月13日(金) 18:30~21:00	1月26日(火) 18:30~21:00	
函 館	函館市民会館	11月25日(水) 18:30~21:00	1月28日(木) 18:30~21:00	
帯 広	帯広市役所	11月27日(金) 18:30~21:00	1月29日(金) 18:30~21:00	
留 萌	留萌市 中央公民館	11月12日(木) 18:30~21:00	1月27日(水) 18:30~21:00	
北 見	北見市民会館	11月26日(木) 18:30~21:00	1月28日(木) 18:30~21:00	

(ラジオ科目) 文明の十字路口—東欧

地区名	会場	第1回 実施日時	第2回 実施日時	第3回 実施日時
札幌	北海道大学 学術交流会館	11月25日(水) 18:30~20:30	12月9日(水) 18:30~20:30	1月21日(木) 18:30~20:30
旭川	旭川市 中央公民館	11月27日(金) 18:30~21:00	1月21日(水) 18:30~21:00	
函館	函館市民会館	11月18日(水) 18:30~21:00	1月18日(水) 18:30~21:00	
帯広	帯広市役所	11月17日(火) 18:30~21:00	1月20日(水) 18:30~21:00	
留萌	留萌市 中央公民館	11月26日(木) 18:30~21:00	1月22日(水) 18:30~21:00	
北見	北見市民会館	11月13日(金) 18:30~21:00	1月19日(水) 18:30~21:00	

◎ 再視聴

地区名	実施場所	再視聴実施期間・日時		備考
		テレビ講座	ラジオ講座	
札幌	放送大学北海道 ビデオ学習 センター (北海道大学内)	10月20日~2月5日 (ただし、月曜日、祝祭日、 年末年始を除く) 10:00~19:00	10月20日~1月22日 (ただし、月曜日、祝祭日、 年末年始を除く) 10:00~19:00	
旭川	旭川市中央公民館	月~金曜日、土曜日(午前中)(詳細は市中央公民館から通知)		
函館	函館市亀田 福祉センター	実施日時は市教育委員会から通知		
帯広	帯広市役所	実施日時は市教育委員会から通知		
留萌	留萌市中央公民館	月~金曜日 9:00~16:00 (詳細は市教育委員会から通知)		
北見	北見市民会館	毎週日曜日 9:00~17:00 (詳細は市中央公民館から通知)		